

○適応行動のアセスメントと支援の必要性

知的機能 → Wechsler 知能尺度

見る、聞く、話す、おぼえる、考える、など物事を理解し情報を処理する力、知能指数（IQ）

適応行動 → Vineland-II 適応行動尺度

セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など環境におけるニーズを自己調整するスキル

- ・適応行動は、それぞれの年齢で重要となるものが異なる
- ・適応行動の評価は、個人が関わる環境の期待や基準によって変化する
- ・適応行動は、環境の影響および支援効果などによって変容する
- ・適応行動の評価は、行動そのものを評価するものであり、個人の可能性を評価しない

適応行動に関する ASD 特性と支援

○自己調整

- ・自分が今のような状態かわからなければ、自己調整はほぼ不可能
- ・なるべく軽度のストレスや環境からの負荷レベルで対処できるようにする
- ・すぐパニックになる、キレてしまうというような場合はすでにストレスが最大限になっていることが予想される
- ・「他者や環境による支援」と「本人がする支援」の割合を本人の発達状態およびライフステージにあわせて「本人がする支援」寄りに変えていく

○生活リズム

- ・学齢期を過ぎると生活リズムをキープする外枠がはずれる
- ・移行支援なしには、卒業と就労の間にブランクができる
- ・趣味、こだわりに没頭→昼夜逆転
- ・余暇の有無も大きく影響する
- ・学齢期が終わるまでに日常生活を維持できる適応行動の獲得は生活リズムの安定につながる
- ・就労支援も就労も生活リズムが確立していなければ効果なし

○衛生

- ・自分の体臭、体の状態には気づきにくい。これまでの一日のスケジュールにいかに関衛生管理を組み込むか

○趣味、余暇

- ・余暇は発達支援において非常に重要なポイント→「適切な余暇」と「安定した生活」は深く関係してる

○こだわり、思い込み

- ・こだわりをやめさせる方向よりも安心できる具体的手法やより適応したふるまいをうながす

○社会的行為としての性行動支援

- ・性行為は「社会的」行為であることを認識。早期教育の重要性。「禁止」より「適切な行動」へと導く